

# Change and Make “安曇川”

## 一生懸命 ～学ぶ・動く・つながる～

### 東京オリンピック・パラリンピックに思う

コロナ禍の中、開催された東京オリンピック・パラリンピックは様々な感動やメッセージを私たちに残り閉幕しました。日本選手の活躍に熱い気持ちになったり、励まされたりしませんでしたか。私は、パラリンピックを見る機会が今までのどの大会より多くなり、選手の皆さんのその動きに感動を覚えずにはいられません。車椅子をすごい速さで操作しての競技、両腕と体幹だけで泳ぐ等あらゆる障害を乗り越えたプレーに、とてつもない練習の上に成り立っていると感じ、ただ「凄い」としか言葉が出ませんでした。それぞれの選手が残したメッセージが次の大会にどう生かされるのか。次のパリが楽しみです。

### 10月以降に向けて・・・グラウンドの除草（草刈り、草引き等）から

新型コロナウイルス感染症の拡大にともなう緊急事態宣言により、9月実施予定の学校行事は、体育祭を10月15日（金）に、文化祭を11月12日（金）に延期して実施する予定です。

10月実施予定であった中体連秋季総体は、9月中の部活動停止を受けて今年度は中止となりました。ただ、部活動再開の準備や体育祭練習の開始に向けてグラウンドの雑草状況を改善するために、安曇川中学校サポートボランティアチーム（ASV20）の皆さんには草刈りの協力のお願いや全校生徒の皆さんには草引きボランティアのお願いをしました。その呼びかけに早速応えていただき、草刈りや草引きでグラウンド状況は改善されています。これからもご協力よろしく願いいたします。



☆夏季大会で優秀な成績をあげた  
男子ソフトテニス部の表彰を学校  
で行いました。  
(その時の様子です。)

安曇川中学校男子ソフトテニス部  
の新たな歴史を刻んでくれた皆さんに・・・



昨年11月に発行された『スマホ脳』（著：アンデシュ・ハンセン）という本は大変興味深い内容です。現在もスマホをめぐる様々なトラブルは後を絶ちません。是非皆さんに一度読んでほしい本なので、そのまえがきの一部を紹介してみます。

新しいテクノロジーに適応すればいいと考える人もいるが、私は違うと思う。人間がテクノロジーに順応するのではなく、テクノロジーが私たちに順応すべきなのだ。フェイスブック他のSNSを、現実に出会うためのツールとして開発することもできたはずだ。睡眠を妨げないようにも、身体を動かすためのツールにも、偽情報を拡散しないようにもできたはずなのだ。

そうしなかった理由—それはお金だ。あなたがフェイスブックやインスタグラム、ツイッター、スナップチャットに費やす1分1分が、企業にとっては黄金の価値を持つ。広告が売れるからだ。彼らの目的は、私たちからできるだけ多くの時間を奪うこと。あなたや私の注目を巡る軍拡競争の中で、さらに技術が向上する。こうして私たちは、ますます多くの時間をSNSに費やすようになる。そして、別のことをする時間がますます減っていく。

テクノロジーは様々な形で人間を助けてくれるし、もちろんこれからも存在し続けるべきだ。だが、一長一短だということ覚えておかなければいけない。そこで初めて、心身ともに健康でいられるような製品を求めることができるのだ。金儲けのために人間の特質を利用するのではなく、もっと人間に寄り添ってくれるような製品を。

つまり私たちは人間の基本設定を理解し、デジタル社会から受ける影響を認識しなくてはならない。本書がそこに貢献できるように願っている。

☆東京オリンピックに関する様々なエピソードを閲覧していて、目に留まった記事があったので紹介します。

体操の絶対的エースとしてオリンピック体操個人総合金メダル2連覇を達成した内村航平選手は鉄棒の予選で落下した。

「人生最大の目標」だった大舞台で経験した挫折。あれから、およそ1か月。

あの瞬間と向き合い続ける苦しみを経て、たどりついた“答え”があった。

（NHK「オリンピック 体操 内村航平“あの瞬間”と向き合い続けて」より）

鉄棒の予選からおよそ1か月たった8月後半。

内村がNHKのインタビューに応じ、あの瞬間を振り返った。

「何が起きたのかわからなかった。気付いたらバーが手になくて、落ちたんだと気付いた」

落下したのは鉄棒の演技に組み込んだ10個の中でも自信を持っていた技。ふだんは失敗したことのない技だった。念入りに確認した難度の高い他の技に比べて調整はわずかにおろそかになっていた。

「ここまでものすごい練習を積んできたので、あとはやるだけ、と過信しすぎていたところはあったのかもしれない。柔道の犬野将平選手が“自分を最後まで疑いたい”と言っていたが、僕にはその気持ちが足りなかったのかもしれない」

「今まで積み上げてきたものが、一気に崩れ落ちた、あの1日でそんな感覚があった。“今までの功績は変わらない”と言ってくれる人もたくさんいたが、僕はもうどうでもよかった。“今できなかつたら意味がない”僕には、そうしか思えなかった」栄光の道を歩んできた希代のアスリートにとって受け入れがたい現実。悲しみや落胆だけでなく、戸惑いがあったという。「東京オリンピックのあと、金メダリストの凱旋（がいせん）のニュースを見るけれど、“自分はもう違うんだな”と感じた。練習してきたことを試合で出せなかったことがこれまでなかったから、どうしていいかわからない」

「努力をしても、結果にはつながらない。結果の出ない努力は、努力ではないのか。そんなことは無いと思う。だとしたら、努力とは一体、何なのだろう」自分のしてきた努力が間違っていたのか、何が悪かったのか、考えても答えの出ない問いに、頭の中が支配された。そして、たどりついた答えがある。自問自答を繰り返して探った道が、体操につながる道と交差した。

「“努力は報われる”。それを証明するために、僕は体操を続ける」

10月に控える世界選手権。そこで結果を残すことが自分の努力を正当化すると考えた。

「努力したのに報われないことが受け入れられない。だから、それを証明する」

もう1つ、4回目のオリンピックで初めてメダルを逃し、思いがけず気付いたことがあったという。

「“オリンピックは、出ることに意味や意義がある”まさにそういうことなんじゃないかな。僕は最初あまりわからなかった。出るだけでは意味ないと思うけどな、と。だけど実際に自分がこうなってみて意味はあるのだと感じた。失敗したとしても人生の教訓をたくさんもらえるから」

金メダルを獲得していれば、オリンピックの後、これほど苦しみ考え続けることはなかっただろう。だが、それによってたどりついた答え、そして、新たに気付いたこともある。

人生最大の目標だった舞台を終えても、なお、内村の模索は続く。

